

ミレニアム教学課題

応用化学系系長

近藤 紘 一

平成十二年度応用化学系系長として応化会会員の皆様方にご挨拶申しあげます。二〇〇〇年は、立命館大学にとって一〇〇周年を迎える記念すべき年であり、西園寺公望侯の私塾「立命館」にさかのれば一三〇年を数えることになり、このような歴史的背景のさなか、この四月、別府市に立命館アジア太平洋大学を開学し、総合学園としていつそうの発展をとげ全国の注目をあつめていることは、ご記憶に新しいことと思えます。六年を経過したBKCKキャンパスにおいても、二十一世紀に向けて飛躍の年にすべく、新たな試みを行ってまいりました。そのいくつかをここに紹介致します。

「大学院カリキュラム」
本学ではゆるやかな六年生を標榜し大学院の拡充をはかってきました。その結果、四月での大学院入学内進学者は四五〇名に達し、一般入学試験を含めると五割の進学者もまぢかになりました。しか

し、高い専門性が要求される院生にあつては指導教員の専門的理解に努めることは当然のことですが、これまでもすれば、単位数だけ揃えればよいという風潮があつたことは否めません。四月から受講登録科目について指導教員の承認を受けること、また、学会に積極的に参加、発表してプレゼンテーション能力を高め、それを単位認定することなど大学院カリキュラムの改訂を行い、後期課程に新たに博士課程五年間の独立専攻「理工学フロンティア」の米春発足をめざすことになりました。

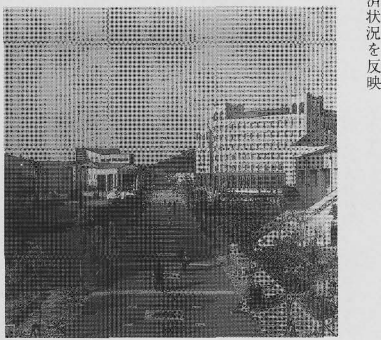
「学部カリキュラム」
本年四月から、学科名を応用化学科、化学生物工学科に改めました。今年の入学者は応用化学科一四五名（環境・デザインインステチュート学生三三名を含む）、化学生物工学科八六名で、例年と変わりません。三年目を迎えた応用化学科所属のインステチュート学生には、今秋に、卒研仮配属、来春

に就職活動をひかえ、文理融合をどのように徹底させるかが課題になつていきます。この四月に早い時期から専門に触れるようカリキュラムの改訂を行い一回生に実験科目を設けました。問題は、少子化、大学の大衆化と共に、学生の学力が明らかに低下していることです。本学の多様な入学試験制度とあいまつて、高校時代、物理、化学の未履修のケースがあり、それらを補充するため、物理の補習授業が本年から始まりました。また、企業との接点を深めるため、休暇期間を利用したインターンシップ制度も発足しました。

「就職状況」
昨今の熾烈な経済状況を反映し、応用化学系学生の就職は、一段と厳しく、七月現在、院生七七％、学部学生五四％の就職率に留まっています。これは修士二回生、学部三回生の後半から就職活動を余儀なくされ研究活動の時間的余裕がない現状では無理からぬところがありませんが、低回生の時期から専門性を習熟させることが肝要と痛感しております。

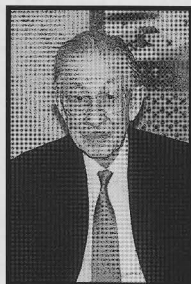
「外部評価」
最近では、各大学の外部評価が盛んになり、一定の評価を得ることは大学の社会的地位の上昇に繋がります。六年を経過した化学生物工学科は、本年、外部評価を受ける年にあたり、その評価が明らかになるのは来年二月になるとのことですが、日頃の活発な研究教育活動からみて、必ずや高い評価を受けるものと期待しております。

このように種々の施策を充実させることがもつた急務となつていることをご理解いただき、皆様方のご協力、ご支援をお願いして私の挨拶といたします。



杉田嘉一郎先生

のご冥福を心からお祈りします。



杉田嘉一郎先生の思い出

岡本 勇 三

(昭和二十七年卒)

昨年の春頃、「有機合成化学研究所同窓会」の定期総会にご臨席下さるよう、お願いにご自宅まで伺ったのが、杉田先生にお会いした最後であったかと思えます。その時、先生は「近頃はかなり体調が悪く、参加すると皆に迷惑を掛けることに成るので、参加できない。」と言われたのを、昨日のように思い出します。過去を振り返れば、理学科・化学科の専門学校生の頃から、小生ほど先生のお世話になった者は、居ないでしょう。当時の小生は、まさに浮世離れした呑気さで、専門学校の卒業直前に、衣笠学舎の東南隅に

に従事することになりました。暫くは先生のテーマ(主として転位)のお手伝いした後、或る種の有機銅錯体に、他の金属触媒を加えずに、Etchell-Craters 反応を行うことに成功し、学位論文の粗稿をまとめた頃、京大工学部の有機金属研究室に、内地留学させて戴きました。恩賜賞を受賞して居られる熊田 誠教授が、「原稿を見てあげましょう。」と言って下さったのですが、「私は立命で学位を取りたいと考えておりますので。」と鄭重にお断りし、暫くしてから、理工学部へ学位を申請致しました。大変複雑な原稿のため、主査を引き受けて下さった杉田先生には、多大のご迷惑をお掛けした事と思えますが、間もなく工学博士の学位を戴きました。その後、研究テーマを有機金属化合物のクロスカップリングに換え、退職する

一年前には、I. Organomet. Chem. の編集委員長から、「指導性のある原稿を投稿されて感謝しています。」という採用通知を受け取り、僅かですが、杉田先生にお返しが出来た、と思っております。



杉田先生の思い出

西村 敬 一

(昭和二十七年卒)



杉田先生の逝去に謹んで哀悼の意を捧げます。

計報と云うものは、何時も突然にやつて来ては人々を悲しませるものです。今回も八月十八日午後、応化会幹事の富田氏より電話で先生の訃報を知りました。思はず絶句、次にあまりにも早すぎると云う言葉をつぶやいておりました。先生が体調をくずされ療養中であつた事は、充分承知はして居りましたが、それにしてもです。八月十九日の通夜、そして八月二十日の葬儀は、市内北プライトホール斉場でしめやかに行はれました。

長田総長、大南前総長、理工学部谷口部長始め諸先生方、はた又応化会田村会長、三上副会長の御参列も遠見され、多勢の卒業生が集り先生とのお別れをして来ました。又、随分永い間会ってない旧友に出遇つたりして、これも先生の御恩かと思いました。学校を卒業して略半世紀、先生との思い出もだんだん薄れ勝ちになつて来て居ます。

先生は何時も笑顔を絶やさず、滋味溢れる温顔で、講義に実験にと接して頂いた事は楽しい思い出として残つて居ります。反面、あの時分の先生は若かつたし、我々も若気の至りとでも云うか、学究の徒として先生を尊敬して乍ら、一方では友達感覚で接していた面がないと云へば嘘になりません。

卒業式後の夜のコンパは長岡京の錦水亭でやつたのですが、宴も酺の頃皆んなで先生と中居さんをおくつて押し倒したりしたの悪ふざけをやり先生を困らせた悪い生徒でもありました。印象に残っているのは卒業時期の実験でした。丁

度市場では塩化ビニール製品が出現し始めた頃でしょうか。

「ティーマーは、先生から頂いたのが、私が選んだのかお忘れしたか、塩化ビニールの可塑性DOPの合成でした。」

椰子油の水素添加では当時も可塑性の雄であった酸水素油脂（現新日本理化（株））の実験工場をご配慮頂き中森恒雄氏のご協力でおクターールを作りました。学校へ帰って無水フタル酸とのエステル化反応等、先生には随分ご指導頂いたものでした。

お蔭で無事卒業する事が出来たとおっしゃって居ります。

昭和三十年代より四十年代にかけては、駆動軸等があり先生、或は同窓生諸兄とはご無沙汰が続きました。

昭和六十年になって杉田先生が定年ご退職になりました。これを機に先生よりのご発案もあり、又吉田巖会長のご尽力もありまして、有機合成化学教室の卒業生を希望して杉田先生を囲む集いが出来るました。

今年で第十四回を迎えますが、杉田先生をメインとして囲む会である以上、杉田先生を悼む会となり、事実上の解散会となります。平成八年第十回の会合にはご出席頂けましたが、歩行が稍困難なご様子でお酒も控えて居られました。

その後ご出席もままならず、出席をお願いしても固辞されたまま二年が過ぎました。杉田先生のお顔を見ない会合は意味も半減しすし、この会の存続にも大きな意味を持って来ますので、平成十年暮れも近い頃に、事務局北尾氏（昭和三十九年卒）と一緒に先生の御機嫌伺いとお見舞を兼ね、先生のご自宅に参上致しました。電話にて訪問したい旨申入れました。処あまり気の進まない様なお返事でしたが強引に理由を付けてお邪魔しました。

恩師杉田嘉一郎先生追悼記

化学科一回卒業生

木村 碩志

(昭和二十七年卒)

(先生ご逝去の報に接して)

平成十二年八月十八日午前四時、杉田先生急性肺炎のためご逝去の報に接し、しばし言葉失う思いでした。立命館大学名誉教授、享年八十歳。

今春は有合会の最後の総会とのこと、杉田先生にもお会いできると楽しみに京都に出掛けました。先生は生憎体調を崩されてご欠席でした。

お会いできなくて残念に思うと同時に先生のご容態を気遣っていたところでした。

お通夜には早速駆け付けました。お頭の中は先生の数々の思い出が、頭の早すぎると云うつぶやきで判って戴けると思っています。今以て信じられません。

杉田先生のご冥福をお祈り致します。合掌。

英語は松村保成先生に習われた由でした。私も県立赤穂中学で当時校長をされていた松村先生に英語の授業をお世話になったのが奇縁で、杉田先生と私は松村先生のニックネーム「ナンナン」を共通話題にして中学生時代を懐かしく話し合ったものでした。

(学舎の追憶)

理学科は元々広小路にあり、入学試験はここで受けたましたが、我々が入学した年から衣笠に移転しました。衣笠には既に立命館日満高等工学校と衣笠で一つにまとまることになりました。校舎は木造で、講義室は2階建、実験室はかなり広々とした平屋建てでした。

今、その面影は全くなくなり、近代的な校舎が立ち並び昔を偲ぶよすがもないほどに姿容を遂げて母校の発展振りがしみじみと感じられます。

昭和二十二年頃はまた戦後の色濃く、軍隊から復員した学生も多く軍服姿をよく見かけました。したがって年齢の開きも大きく、年配の者は先生と余り差はなく、先生とは師弟でありまた兄貴的な親近感を持っておりました。

た。

先生の有機合成化学の講義は大変人気があり新進気鋭の学究という感じで、教室は何時もいっぱい状態で、私も毎回講義を楽しみにしていました。聞くところによると、先生は毎回講義のノート作りに大変な努力をされていた由でした。

(研究の思い出)

杉田先生は立命館で学生の指導にあたられたたわら、京都大学に於て授けられたフリス、反応に類エステル、フリスの転移、ナフトエ酸およびナフトイル酢酸のフェニルエステルのフリス転移等の研究を精力的になされておりました。

新入生の頃、学生サークルの化学研究会に入部させていただきました。杉田先生と分析の本島先生とが顧問で、このサークルを「化研」と呼んでいました。学生の実験室の隣の実験台が4台ほどの小さい部屋で、メンバーは十数人だったと記憶しています。講義が終わるとそこに詰めかけ、それぞれテーマで深夜まで実験していました。当時は砂糖が不足していたので人工甘味料のズルチンやサツカリンなどを合成している人もいました。京都大学から塩素素ンペを借りてきて、塩素化反応をやっていた人が塩素素ンペのバルブ不良のために塩素ガスを外に洩らしたこともありましたが、また、当時は食料難でしたが、よく徹夜で実験をした夜など、実験とは半ば口実で半分コンパ、田舎出身の人が持ち寄った米を飯盒で炊き、どぶろくや合成ウイスキーを持ち込んで度々語り明かしたものでし

造を解明し学会発表と同時に京都大学に薬学博士論文を提出し、無事に学位を授与されました。早速、杉田先生に報告しましたところ大層喜んで頂きました。その後多くの門下生が学位を授与されましたが、私が最初ではなかったかと思えます。

(先生と野球)

杉田先生を野球を抜きにしては語れません。それ程野球を愛されておりました。静岡高等学校のころ既に野球部のレギュラーとして活躍されていました。

戦後物資の乏しく苦しい時代にプロ野球が復活し、川上、青田、藤村、鶴岡などの選手が活躍して国民に大きな娯楽を提供した時代でした。したがって我々学生も放課後や実験の合間に隣にあった運動場でよく野球に打ち興じました。この当時は各科で野球熱が盛んでしたが、杉田先生率いる我が有合チームは常に最右翼で度々優勝を勝ち取り、これが後々まで有合教室の伝統となりました。昭和二十三年頃、衣笠山の麓に野球場の建設が始まりました。我々も動員されてモッコを担いで土運びに汗を流したこともありま

した。元来大学専用の球場と言うことでしたが、当時京都にあった松竹ロビンス球団のホームグラウンドにもなっていました。木造のスタンドがホームベースから左右に伸びたこじんまりした球場でしたが、プロ野球の公式戦も行ったが、関西六大学の野球が行われていました。プロ野球は入場料が要るので衣笠山から高見の見物を決め込み、我々が一番青春の血湧き肉踊らせた野球は何とんでも同立戦でした。試合が近づくとそわそわして実験もそこそこ応援に駆け付け、球場は何時も満員の状態ででした。

学内の野球大会もこの衣笠球場でしばしば行っておりましたが、他の球場で木造スタンドの事故が発生したため、衣笠球場も数年で取り壊される運命となりました。このような中で杉田先生は硬式野球部長に就任されました(昭44 48)。

当時、関西六大学から京滋リーグに格落していた立命の野球部が見事に建て直し、二度までも関西六大学で優勝に導かれた先生の手腕には細野武雄総長(当時)も大いに感服されておりました。先生はいつも「物事は悲観的に考えるより、全て明るい方向に向かって考えることが大切だ。如何なる悪

(おわりに)

先生との思い出は紙面に尽くし難いものがありますが、先生の最大の功績は八〇〇有余人に及ぶ有能な門下生を社会に送り出されたことでありましょう。最近の卒業生名簿を見て明らかのように、あらゆる業界に先生の門下生の名前が見られます。特に化学産業界においては多数の人材が全国に展開し、オーナー、経営者、管理職として、大手企業においても枢

要な職務で活躍していることは誠に頼もしい限りです。

我が母校立命館大学は今や数多い大学に先駆けてすばらしい飛躍発展を遂げ、全国大学の評価ランキングでもトップクラスに位置するようになりました。毎年朝日新聞社から発表されている、全国大学の学長から見た総合評価ランキングを見ますと我が立命館大学の評価は各項目において慶応義塾大学と一、二位を争っており、全国のトップクラスにあることは一目瞭然で、昔を考えると深い感慨を覚えます。この頃、杉田先生が常務理事に就任され、また我が理工学部出身の大南先生が総長に就任され学園の発展に寄与されました。さらに、理工学部が、びわこ・くさつキャンパス(BKC)に移転してからは毎年目を見張るような発展振りを示しています。先生もこの時期には随分ご苦労も多かったことと拝察し、立命館大学の発展のための礎として力を尽くされたことに心から敬意を表する次第です。今春は大分県に立命館アジア太平洋学院が設立され、立命館大学の名声は日本のみならず世界の注目を集めるようになります、正に世界に羽ばたく大学に成長したと言えましよう。

一方、別の角度から、その大学

の卒業生の質と量による評価で大学の価値を問われる時代になってきました。卒業生があらゆる分野で活躍しているか?その大学の魅力、将来性によって左右される受験生の数(合格率)は?我が立命館大学の受験生の数は、この少子化の時代においても八万人から十万人を集めていることは実に驚異的で、高い評価の一端を表していると言えましよう。今年は学園創

問 業学博士)

☆立命館大学立命館大学立命館大学立命館大学立命館大学立命館大学立命館大学立命館大学立命館大学立命館大学立命館大学

二十一世紀の学校づくり

目片 康人

(昭和六十一年卒)
滋賀県立瀬田工業高校教諭



始一三〇周年、創立一〇〇周年の大きな節目を迎え、校友二十六万人になんなんとする大学園に発展しました。これを契機に二十一世紀に向けて大いなる母校の飛躍を祈念すると共に、我が立命館大学の歴史と共に歩まれた恩師杉田嘉一郎先生のご冥福を心からお祈り申し上げ追悼の記と致します。

(*アース環境サービス(株)顧問)

湖国、滋賀に理工学部がBKCとして移転して早や六年が経とうとしていますが、衣笠時代では考えられない程ゆとりとした空間を利用した環境はただだらやましい限りです。この度そのBKCに

的に判断し、問題を解決する資質や能力を育てることが不可欠になります。これは特定の教科にかかわる提起ではないので、導入に際して指導書等があるわけではなく、ただ漠然とした理念で各校が独自のカリキュラムの準備が行われています。これまで本校では卒業年度の実習授業の一環として「課題研究」を行って、生徒の興味関心から生まれるので、どうしても身近な化学製品(クレヨン・クレパス・消しゴム・石鹸等)の合成から始まりますが、生徒自らが考え、実際に実験を行う事によって、机上で学んだことをさらに深く、化学分野について一層の興味を呼び起こすことを目指しています。

併せて「学校評議員制度」も導入され、既存のPTA組織以外に地域の声(評判)を各校の教育課程(カリキュラム)に反映させることに取り組んでいます。一般的には三者(生徒・PTA・職員)協議会として、各校をよくするための意見交流会が開催される様に定めました。今後はもう一歩踏み込んで地元参加型のフォーラム形式が主流になるのではないのでしょうか。参加者が皆対等平等の立場で直接意見を交流させることに主眼がおかれ、学校を広く一

般に開放することは、特定の意見や勢力が話し合いの場を牛耳るものではなく、参加者教育的な良識にゆだねられるものではないかと、いこうです。

これまで学校教育課程に地域の声が届くことは稀だったかもしれませんが、特色のある地域に根付いた学校として広く開放するために皆様方のご協力が不可欠になります。先輩諸氏その節はよろしくお願い致します。

「応化会通信」

新会員名簿発行のお知らせ

今年三月一日、平成十二年版の会員名簿を発行しました。

★年會費二カ年分完納の会員には、無料配布致しました。(郵送料は会員負担)

★上記のほかご希望の方には一冊二千円、送料五百円で販売致します。送金は同封振替用紙をご利用下さい。

定年退職にあたって

林 隆 俊



今年は世紀末であると共に、立命館にとっても創立百周年と言う節目の年に、私も人生の大きな節目である定年を迎えることになりました。振り返ってみますと、私は大学卒業後、一貫して教育の世界を歩いてきたことになりました。大学を卒業して、はじめて教壇に立ったのは中学の産休講師でした。その後、運良くすぐに高校の化学の教員の席があり、六年間教員を勤めた後、これも運良く大阪大学工学部に助手の席があり、九年間阪大でお世話になった後、立命館に赴任してきました。そして今日の定年まで無事に勤めを果たすことが出来たのは、私に取りましてラッキーな人生であったと感じておられます。

立命館大学は理事会を中心として、理工学部の充実のために、衣笠からあまり遠くない地点に新しいキャンパスを確保する計画を進めました。一拠点から再び二拠点を目指すことになったのです。立命館の力量から考えると、この計画は果たして私の在任中に成し遂げられたのだろうか?と思っただけです。所が、私の予想に反して滋賀県、草津市、理事会等のご努力により理工学部の新天地への移転が夢物語ではなく現実の問題になったことは、心からびびくりいたしました。そして皆様もよくご存じと思いますが、今から六年前に理工学部のびわこ草津キャンパスへの移転が実現しました。これは、私の二十八年間にわたる立命館大学での教員生活の中で最大の出来事であり、非常に幸運に恵まれていたと感謝いたしております。びわこ草津キャンパスの実現は、単に幸運であったのではなく、日頃から多くの卒業生の皆さんの直接・間接の応援があったればこそと、我々関係者一同はOBの皆さんに感謝いたしております。

最後になりましたが、同窓会の皆様益々のご健勝を祈念しての二十八年間の終わりに際しての感謝の言葉に代えさせていただきます。

本年三月末日をもって、応用化学科の教授を退職致しました。総務部の計算によりますと、三十九年七月という水きにわたり、立命館大学に奉職させていただきました。若年・中年・高年と、すべて立命館のなかで、或いは立命館とともに歩んでまいりました。またその間、実に愉快に、楽しく過ごさせていただきました。私自身も、応用化学系(化学・生物工学)の先生方、応化会の皆様方等々の深い御理解と御支援の賜物と感謝致しております。さらには、四月一日付で、特別任用教授として、引き続き立命館大学に奉職させていただきますことになり、誠に幸甚なことと、御礼・感謝申し上げます。今後とも、何卒旧に倍するご厚誼の程お願い申し上げます。

振り返りますれば、立命館での奉職のスタートは、昭和三十五年(一九六〇)九月一日付をもちまして、再び立命館大学に助手として戻ってまいりました。当時の建物は、衣笠キャンパスの現修学館・学而館・図書館の全面積部分(周囲をとりかこむ道路だけが昔と同じ区画)に、五連程の東西に細長い木造(勿論平屋一階建)の、兵舎のようなバラック建築の棟を、適当に区切って研究室部があったわけです。北側二連は化学系各研究室、中間には機械系各研究室、その南には土木系各研究室が並んでおりました。そしてさらに南側は広い庭のような空地がありました(ここが現修学館敷

キャンパスの六号館に化学科の研究室が置かれていまして、教授十名、助教二名、助手八名という顔ぶれでした。そしてこれらの教員が、約八十名の卒研究生と、一学年の定員が五名の大学院生を指導しておりました。現在のびわこ草津キャンパスと比較すると、その当時は卒研室も狭く、少ない研究費で、いかに成果を上げるか大変な努力が必要でした。大学院生の定員が少なく、今から振り返ってみると、立命館の水河時代であったと感じております。また、その当時は、広小路キャンパスと衣笠キャンパスの二拠点に分かれていた。大学の運営に何かと不便がありました。そのために一拠点計画が持ち上がり、広小路を閉鎖して、全ての学部を衣笠に集中させることになりました。一拠点計画が完成したとき、世の中は理工系の人材を多く必要とする時代になっていました。社会の要請に因應するために理工学部を充実させようと考えましたが、一拠点が完成したため、キャンパスに増設するための土地の余裕が全く無くなっていたのです。立命館の将来を考えると、私には、理工学部の充実を避けて通れない課題でした。そこで、

- 立命館在籍中の略歴
- 一九七七年四月—一九七八年三月 理工学部化学科主任
 - 一九八〇年四月—一九八一年三月 全学入試委員会副委員長
 - 一九八一年四月—一九八二年三月 理工学部主事
 - 一九八二年四月—一九八三年三月 全学入試委員会副委員長
 - 一九八三年四月—一九八四年三月 米国スタンフォード大学へ留学
 - 一九八四年四月—一九八五年三月 理工学部化学科主任
 - 一九八六年四月—一九八八年三月 理工学部大学院委員
 - 一九九〇年四月—一九九二年三月 理工学部化学科主任
 - 一九九四年四月—一九九九年三月 理工学部応用化学系学系学長

山本善史



本年三月末日をもって、応用化学科の教授を退職致しました。総務部の計算によりますと、三十九年七月という水きにわたり、立命館大学に奉職させていただきました。若年・中年・高年と、すべて立命館のなかで、或いは立命館とともに歩んでまいりました。またその間、実に愉快に、楽しく過ごさせていただきました。私自身も、応用化学系(化学・生物工学)の先生方、応化会の皆様方等々の深い御理解と御支援の賜物と感謝致しております。さらには、四月一日付で、特別任用教授として、引き続き立命館大学に奉職させていただきますことになり、誠に幸甚なことと、御礼・感謝申し上げます。今後とも、何卒旧に倍するご厚誼の程お願い申し上げます。

振り返りますれば、立命館での奉職のスタートは、昭和三十五年(一九六〇)九月一日付をもちまして、再び立命館大学に助手として戻ってまいりました。当時の建物は、衣笠キャンパスの現修学館・学而館・図書館の全面積部分(周囲をとりかこむ道路だけが昔と同じ区画)に、五連程の東西に細長い木造(勿論平屋一階建)の、兵舎のようなバラック建築の棟を、適当に区切って研究室部があったわけです。北側二連は化学系各研究室、中間には機械系各研究室、その南には土木系各研究室が並んでおりました。そしてさらに南側は広い庭のような空地がありました(ここが現修学館敷

地)。この空地の東南隅に有機合成の実験室が、そして二号館二階に分析実験室がありました。夏は扇風機もなく、汗だくでシャツの上に白衣をまどって実験をしていました。床はコンクリートを打ち込んでフラットにしただけで、厳冬は足の先が痛む寒らしい思いをしました。暖房は中実験室の中央にダルマ型の石炭ストーブが一台あり、教授は実験室の一部を間仕切りした閉いの中で、ガスストーブがある程度でした。ただこのストーブを使っていることから、エントップ部或いは屋根裏に吹き上げられた「スス」が、投稿原稿の図面等の作製中に落ちてきて、知らぬ間にサアと黒い筋が入り、消しゴムでもなかなか消えないのは困りました。また、当時の学会発表は、約一メートル以上の大きな紙に図・表を書き、それを小脇にかかえてもって行ったもので、その後もなくスライド形式に変わり、さらにOHP、カラーOHPと、学会発表の形式もずい分と変遷してきました。

一九六五年六号館が竣工、全化学系と全土木系研究室が大移転しました。旧実験棟では大実験室、中実験室、X線室、細長い天秤室と、実験を行ったことから、六号館では一実験室とX線室のみとなり、何かウサギ小屋か鶏舎に

ほり込まれた感じで、非常に窮屈な思いをしました。確かに実験室も実験台もすべてビカビカでその上個室ももらったわけなのですが、程よくとじ込められたという感じの方が強かったです。暖房もすべてガスストーブに変わり、石炭ストーブのワズラワシサからは、脱れることができました。

旧来の実験室に比べれば狭いながらも、この六号館での研究生活は、非常に実り多いものがあります。次々と訪れてくれる応化会OBの諸君との会合、その中から貴重な御意見と御援助等々、学部生・院生の研究成果と就職活動に大きな役割を果たしてくれました。新ためて感謝の意を表する次第です。

平成六年（一九九四）四月、わたしでもB・K・Cへの研究室の大移転、私にとって第三番目の研究室、広々とした自然環境の中、まさに「緑の新天地」と云うべきでしょう。松岡政夫先生と隣同士の研究室へ、そして間もなく玉置純先生も見えられ、いつも三人のお話になりました。講義は、「私の歩んできた道」と題して行われましたが、その中で「大学教員」のよさは、「繰り返してはなぐ、日々新しいことに触れることが、できること」と述べられています。その延長線上にあるのか、日常生活においても「未知の世界を知る点で学問と同じ」ということ

林隆俊先生の御定年退職にあたって



岡田 豊
(昭和五十四年卒)

皆様ご存知のとおり、林隆俊先生は、一九七二年に立命館大学に御就任以来、二十八年間にわたり立命館大学理工学部にて御奉職になりました。本年三月御定年退職されました。この間、有機反応化学研究室を主宰され、約三五〇人の卒業生・院生を送り出されました。また、学系長をはじめとした学科・学系内の役職のみならず、理工学部の主事や大学院委員としてもご活躍されました。

先生は、旅行を趣味とされています。そのためか、研究室での雑談などで学生の出身地の話になると、日本全国北から南まで、ほとんどの土地をご存知です。同窓生の皆様のなかでも、ご自身がこのような話題の主役になったことを覚えておられる方もあります。旅行の話題に限らず、非常にお話好きで、研究室に顔をだしては、学生をつかまえて、いろいろな話題について二・三時間も話をされることもありました。学生に対しては、「やること（勉強・研究）さえやっていれば、いくらでも遊んでもコンバ・卒研旅行などには必ず参加されました。その席でも、いろいろな話題で盛り上がったのはいうまでもありません。

さて、この文章の表題は「御定年退職」となっていますが、先生はこの四月より特任教授として、引き続き立命館大学に在籍されています。先生にはご迷惑かもしれませんが、まだまだ先生のお力をお借りしなければならぬことが多くあります。先生のますますのご健勝と、ご活躍をお祈りいたします。

山本善史先生との思い出



玉置 純

あったと思う。それから、先生を九大大学院総合理工学研究科までご案内した。私の助教授人事で山本先生が主査であり、学内でのいろいろな審査の結果、内定したので、故清山哲郎先生（九大名誉教授）や当時の私の上司であった山添昇先生（九大教授）にご挨拶に

来られたのである。それ以来、先生が二〇〇〇年三月に定年ご退職になるまで、エネルギー変換化学研究室を二人で運営してきた。先生とは、四年ちよつとの短いおつき合いであるが、その間、多くのことを先生から学んだ。特に、入づきあいの細やかさは天下一品で、勉強することが多々あった。

企画運営委員会報告

東 正弘
(昭和四十一年卒)

例えば、最近では次のようなことがあった。今年の三月、私は外留中でフランスにいたが、電気化学会から春の学会での座長依頼があった。当然のことながら無理なので、山本先生と連絡をとりながら電気化学会関西支部の若手の先生に代理をお願いして快諾してもらった。これらの手続きは全部山本先生にやってもらって大変助かったのであるが、さらに「○○先生とは、これからもおつき合いがあるやろうから、ボルドーの絵はがきで今回の代理の件の礼状を書いておきなさい」と後からFAXが来た。早速そのようにしたが、私はそこまで気が回らなかったのは、これには全く感服した。先生は、このような形で指導して下さいているんだと思ひ、感謝して進めようと思う。先生は、ご退職後も特任教授として教鞭をとっておられるが、ますますお元気でこ

活躍されることを心からお祈りしています。また、これからもいろいろとご指導よろしくお願いいたします。

世話人 伴野清氏(四十二年卒)

次回の予定を十一月十八日(土)宇治カントリークラブで開催することを決めました。

応化会の親睦活動を目的として、ゴルフ・山歩きの会を開催致しました。

●第二回「音羽山徒行会」

平成十一年十一月六日(土)川口士郎氏(四十年卒)をリーダーに、男性四名女性一名の参加があり、秋の一日心地よい汗をかき、次回の開催を期待して分かれました。

●第三回「ゴルフ懇親会」

平成十一年十一月十三日(土)レックスワンカントリー倶楽部で開催し、十名の参加者がありました。プレイ後の懇親会も楽しく盛り上がりました。

世話人 東 正弘(四十一年卒)

●第四回「ゴルフ懇親会」

平成十二年五月十三日(土)新大阪ゴルフクラブで開催し、十一名の参加がありました。

立命館大学 写真研究会 O B 会

岡 本 朗
(昭和三十三年卒)

写真研究会 O B 会の本年第二回目のカメラハイキングは晴天に恵まれた七月二十九日(土)に草津市烏丸半島方面で行いました。

先ず、JR草津駅に O B 会会員とゲスト参加の計十八名が集合、バスにて先ず蓮の群生地へ、見渡すかぎりの蓮の花を思い思いに撮影に熱中。その後隣の草津市立水生植物公園にて撮影と昼食。さらに琵琶湖産淡水魚の水族館もある

県立びわこ博物館を見学。終了後バスにて JR 草津駅へ、駅近くの喫茶店で歓談のあと解散。なお、参加者中応化会会員は半数の九名でした。以上。

「写真展のお知らせ」

今年は立命館大学創立一〇〇周年、写真研究会創設五〇周年を記念して「第二回記念写真展」を十一月三十日(木)〜十二月六日(水) 午前十一時〜午後七時 四条河原町北東のフォトコリドー ル・ムツミ にて開催致します。皆様のご高覧をお待ちしております。

催のご案内をさせていただきます。応化会会員の親睦のためにぜひご参加下さい。



絵：原田克巳



烏丸半島の蓮の自生地にて



草津市立水生植物公園にて

UCSBでの留学の思い出

玉置 純

私は、一九九九年四月から一年間、留学の機会を与えられ、最初の九ヶ月はアメリカ、カリフォルニア大サンタバーバラ校(UCSB)で、残りの三ヶ月はフランクス、ボルドー大学マイクロエレクトロニクス研究所で、それぞれ異なるテーマでしたが、充実して勉強させていただきました。この

間、東回りで世界一周したことになり、アメリカとヨーロッパといふ全く異なる文化の中で暮らすこ

とができ、良い経験ができたと思います。簡単に比較すれば、アメリカでは広大な大自然を(西海岸に行ったせいもあると思いますが)、フランスでは歴史の重みを楽しんできたかなあという感じがします。ここでは、紙面も限られているので、サンタバーバラでの思い出を書きます。

サンタバーバラは、ロサンゼルスから海岸沿いに車で約二時間北上したところにある小さな町です。この付近は海岸線がほぼ東西に走っており、北に一〇〇m級の山(Santa Ynez 山地)、南は太平洋(沖合には Santa Cruz 島などからなる Channel Islands 国立公園がある)にはさまれた横長の平野部にあります(ちょうど神戸のようです)。八月でも気温は二八度を越えないくらい涼しく、さらにカラッとしているのでとても過ごしやすくて、避暑地になっています。ただし、北側の山を越えるとそこは別世界で、気温も高く乾燥しています。有名なカリフォルニア

ワインのワイナリーは、山の北側にたくさんあります。以前はスペインの支配下であり、そのためスペイン系の人が多く、町並みもスペイン風で白壁にオレンジの瓦がらなど印象的です。年中いろいろなお祭りが催されますが、八月上旬の Old Spanish Days というお祭りが最も大きく、パレードやコンサートが繰り広げられます(写真1)。

UCSBのキャンパスは、西隣の Goleta という町にあり、BKC の七倍くらい広い広大な敷地に建物がかうまく自然の中に溶け込んでいます。私が勉強してきた研究室は、Mauritis Depn. の Prof. F. Lange の研究室で、先生は、構造セラミックスから電子材料にいたるまで幅広くセラミックスの研究をしていらっしやいます(写真2、中央の立っている人が先生)。研究室は大学院生が主体で、学生はアメリカ全土から集ってきます。彼らは勉強の仕方について「no hard, but smart」(がむしやらに勉強するな、スマートにやれ)とよく言われているようで、研究室で夜遅くまでがんばるというのはありませんが、よく勉強しているように、議論が始まると白熱します。また、留学生も世界中から数多く来ています。日本人も私の

ような大学からの訪問研究員のがかなりいました。サンタバーバラ日本人会なるものがあって、情報交換や親睦会などがあって楽しみました。余談ですが、ハリウッドスターの Michael Douglas は UCSB の卒業生で、四月末にキャンパスで学生向けに講演しました。彼を見てるのはもちろん初めてで、印象としては普通の気さくなおじさん、でも声は映画と同じ(当然)でした。

一年間のはじめの海外生活でしたが、たくさんの人と知り合え、かつ、大変よくしてもらい、おかげで暮らすことができました。また、このような機会を与えていただきました応用化学系の先生方には大変感謝しております。

常盛んで、各家庭でいらなくなったものを家の前などで安く売っています。新聞に広告が出ていて、広告を見ては買いに行き、ほとんどの家具をガレージセールで安く揃えました。ほぼ落ち着いたところか、Prof. Lange と研究テーマについてディスカッションしました。私は、先生の BaTiO3 や PZT などの強誘電体薄膜の水熱法によるエピタキシャル成長の研究に興味があったので、テーマは、電気化学的手法による BaTiO3 薄膜のエピタキシャル成長になりました。このとき、「This is your task」といわれ、さちつと成果を出して論文を書いてほしいとのことでした。この一言で気が引き締まり、一生懸命やらねばと思ったものです。お陰様で、わりと初期の段階からいいデータが始め、約束通り論文を一報仕上げることもできるとともに、さらなる発展の種も残すことができました。

一年間の海外生活でしたが、たくさんの人と知り合え、かつ、大変よくしてもらい、おかげで暮らすことができました。また、このような機会を与えていただきました応用化学系の先生方には大変感謝しております。

一年間の海外生活でしたが、たくさんの人と知り合え、かつ、大変よくしてもらい、おかげで暮らすことができました。また、このような機会を与えていただきました応用化学系の先生方には大変感謝しております。



写真1 Old Spanish Days でのパレード



写真2 シアトルで開かれた American Ceramics Society Meeting にて

応用化学系紹介

本年三月をもちまして化学科の林隆俊先生と山本善史先生が定年により、退職されました。四月から、花崎知則先生と高木一好先生が助教授として着任しておられます。また、昇任人事に關しましては、吉田真先生、小堤和彦先生が助教授から教授に昇任されました。

学科名称について昨年お知らせいたしましたとおり、本年度より化学科は応用化学科に、生物工学科は化学生物工学科に、それぞれ名称が変更されました。

新任の先生から一言



高木一好先生

本年四月より応用化学科にお世話になっております。私は、昨年三月に大学院博士後期課程を終えたばかりで、まだまだ勉強不足、経験不足であると自覚しております。これまでの七年間、京都での学生生活においては、生体触媒(微生物細胞、酵素、機能性低分

子)の高度利用を目指し、生体エネルギー変換機構の解析、および、その応用を課題として研究を行ってまいりました。特に、電気化学的手法を用いることに、還元酵素やフラクターの酸化還元挙動を詳細に解析すると同時に、それらが触媒する反応を電気化学的に制御することを試みてきました。今後、本学においては、これまでの研究を進展させるとともに、環境科学への応用といった面も意識して、特に、微生物のエネルギー代謝反応の解析と、その物質評価・物質変換システムへの応用について、新たな知見を追求してゆきたいと考えております。

同窓会の皆様には、今後、お世話になることが多々あることと思われませんが、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

略歴

一九九四年 京都大学農学部農芸化学科卒業

一九九六年 京都大学大学院農学研究科修士課程修了

一九九九年 京都大学大学院農学研究科博士後期課程修了

二〇〇〇年四月 本学に着任



花崎知則先生

本年四月、応用化学科に助教授として着任いたしました。専門は有機材料化学で、液晶などの機能性有機材料の合成と物性評価を行っております。学生時代の九年間を衣笠で、その後一年間をBK Cで過ごした後、前任校に職を得て静岡に移りました。そしてこのたび、母校の教壇に立たせていただけるという、願ってもない機会を与えていただきました。大学院生だった頃から、新しい物質を作るという事に興味を持ち続け、分子内に鉄原子を持つ液晶や、非対称型の二量体液晶などの合成を行ってきました。また、機能性高分子ゲルなどにも興味を持ち、そちらの方面への展開も始めております。大学院生だった頃、自分で苦勞して合成した物質が初めて液晶性を示した時の感動が、昨日の事のように思い出されます。そんなモノ作りの面白さを学生たちに感じてもらえれば、またそれをきっかけに幼い頃に抱いた知的好奇心を彼らが思い出してくれば嬉しい、彼らとともに新しい

モノ作りに挑戦していきたいと思っております。同窓会の皆様にはお世話になることが多々あると思いますが、今後ともよろしくお願ひいたします。

略歴

一九八九年 立命館大学理工学部化学科卒業

一九九一年 立命館大学大学院理工学研究科応用化学専攻博士課程前期課程修了

一九九五年 静岡理工科大学理工学部物質科学科 助手

一九九九年 静岡理工科大学理工学部物質科学科 講師

二〇〇〇年 本学に着任

博士(工学立命館大学)

応化会通信

パソコン名簿管理奮闘記

名簿管理委員長

岸 要

(昭和二十五年卒)

応化会会員名簿二〇〇〇年版が本年三月に通算第五号としてめでたく発行されました。名簿のパソコン管理による第一号です。一九八一年、応化会会員名簿の

名簿の基礎データは校友会から受領して応化会のパソコンに入力されました。

その後に続く約百件、氏名と住所が一行食い違っているのが見付かりました。

正確無比であるべきパソコンに何故このような事が起こるのか頭を抱えて考え込んでいた間に、会

郵便番号も変換ソフトで新郵便番号に修正されました。

名簿管理委員長の職責上、私も会員名簿のデータを確認しておこうとパソコンの画面に呼び出して「あっ!」と驚きました。

神戸市の住所に京都市の郵便番号、北海道の住所に鹿児島郵便番号といった具合に番号が全く気儘に行き交ったところから始まりました。

この数約二百件、ぼすたるカイドを片手に手作業で番号修正を入れました。

正確無比であるべきパソコンに何故このような事が起こるのか頭を抱えて考え込んでいた間に、会

員の住所や勤務先等、消息変更の知らせが次々と届きます。

パソコン機能上の問題、住所・新郵便番号の不備、会員の情報変更等、問題処理の作業を進めるうちに、既版の名簿にも住所不備等記載内容の誤りが多数有ることが判り、結局悪戦苦闘は約二年の長きに亘りました。

この間、白石先生には夏休み冬休みも返上でご尽力戴き、事務局の武藤さんにも献身的なご努力を戴きました。

また、この期間に三人代替わりしましたが、応用化学系事務室の台田、飯塚、中川さん達にもいろいろご助力戴きました。

名簿管理委員の各氏もコンピュータや印刷のプロを始め各年度を代表する有能な方々で、大変心強いご協力を戴きました。

名簿管理上最大の問題点は既版の名簿データの住所に誤りが大変多い事でした。

パソコン画面でデータを逐一見ていきますと新郵便番号の下四桁が零表示のものが大変多いのです。

これらは住所表示に誤字・省略、曖昧表示が少しでもあると、パソコンの正確無比な機能が災いして、交換ソフトを利用して新郵便番号に対応できない為でした。

例えば、会員の居住が最も多い京都市の住所で「上京区黒門通丸太町上ル」の様に交差する通りも町名で記載されていないと新郵便番号は表示されません。

また、古都の歴史に由来して難解複雑な住所も多く、これらは簡略した表示で済まされる事が多いのですが、これもパソコンは受け付けてくれません。

全国各府県の住所にも誤字、表示間違いが数多くありました。

例えば、「奈良県柏原市」(大阪府柏原市)「犬山市橋爪」(堺市山手橋爪)「堺市暮堤町」(堺市暮堤町)等々、(一)内が正しい表示ですが、抜き取りサンプリックなチェックの左右に不安が拭えず、結局町名入り詳細地図、既版名簿等を並べて全数チェックする大作業になりました。

それでもなお住所表示が曖昧なものには新郵便番号と対応できず、全数を正しく修正することはできませんでした。

三年後、次回の発行に向けて、更に正確で信頼できる名簿にするために、会員の皆様に郵便番号、住所は行政で決められた正しい表示を事務局にご連絡下さるようお願いする次第です。ご参考に今回修正しました住所正誤表示の一部を別表に掲げます。以上。

立命館大学理工学部
同窓会連絡協議会
設立される

一九九八年に理工学部が創立六〇周年を迎え、一九九九年一月二十四日に立命館大学理工学部創立六〇周年記念校友大会が成功裡に開催されたことは、前号第十七号の応化会ニュースでお知らせした通りです。この大会で、理工学部全体の同窓会組織の連合体として立命館大学理工学部同窓会連絡協議会を設立することが承認され、同準備会において諸準備が進められた結果、本年五月十三日機友会の島田泰男氏を会長に同協議会が設立されました。

同協議会は応化会、建設会など六つの同窓会を母体に運営され、「これら同窓会活動を支援し、理工学部同窓生の親睦を深めるとともに、立命館大学校友会と連携しながら、母校および理工学部の発展に寄与することを目的とする」と同協議会規約に謳われています。

同協議会の役員として、応化会から、田村弘三郎氏が副会長に、松田十四夫先生が事務局長に、さ

らに三上正勝氏、岡田豊先生、久保幹先生、白石晴樹先生、立木隆先生、森崎久雄先生の六名が幹事に、それぞれ就任されました。

平成十二年度年会費(平成十三年三月三十一日迄)二千円を納入下さいませようお願い申し上げます。過年度分の会費の納入、未納入に関係なく平成十二年度分を納入下さい。

年会費は、会運営の柱です。全会員の皆様が完納下さいますようお願い申し上げます。

会員の皆様の会費納入状況を同封しています。平成十二年度分と共に、過年度分の納入につきましてもご協力下さい。

送金には、同封の振替用紙をご利用下さい。なお、領収証は、郵便局の発行する受領証をもって代えさせていただきます。

(注：平成十二年三月卒の一部の会員は、平成十二年度分の会費を納入済です。)

平成十二年度年会費
納入への協力をお願い

会員名簿 新郵便番号および住所正誤表

誤りの分類	新郵便番号	正しい住所表示	誤りの住所表示
似た音読み	〒620-0201	福知山市天座	福知山市天田
	〒571-0021	門真市舟田町	門真市船田町
	〒652-0046	神戸市兵庫区上沢通	神戸市兵庫区神沢通
	〒600-8121	下京区加茂川筋上ノ口下ル菊屋町	下京区鶴川筋上ノ口下ル菊屋町
似た文字	〒604-0923	中京区木屋町御池上ル上穂木町	中京区木屋町御池上ル上穂木町
	〒615-8161	西京区櫻原蛸田町	櫻原蛸田町
	〒603-8153	北区長乗東町	北区長来東町
	〒699-4625	邑智郡邑智町築瀬	邑智郡邑智町築瀬
町の表示	〒602-8383	上京区西今小路町	上京区西今小路別府市荘園町(町が付か付かないかで番号が変わる)
	〒874-0838	別府市荘園	
	〒525-0034	草津市草津	
	〒525-0036	草津市草津町	
表示の省略	〒606-8061	左京区修学院宮ノ島町	左京区修学院宮島町
	〒616-8001	右京区奄安寺御陵ノ下町	右京区奄安寺御陵下町
読み違い	〒604-8832	中京区壬生下溝町	中京区壬生大溝町
	〒615-8193	西京区川島玉頭町	西京区川島五頭町

事務局長より

応用化学系事務室の担当が今年四月から中川知子さんに代わりま

応化会名誉会員

(敬称略)

応化会役員名簿

(敬称略)

▼年度幹事▲

専門学校

顧問

尾池 耕三 (23年卒)

昭和18年卒 新谷 利保

会長

大田 雄三 (27年卒)

20年卒 岩村祐三郎

副会長

大原八十八 (30年卒)

23年卒 野崎 清

常任幹事

北村 清

24年卒 山田吉之助

岸

要 (25年卒)

22年卒 山田 益三

立木

隆 (63年着任)

26年卒 山田吉之助

谷口

吉弘 (40年卒)

23年卒 福見 幸司

竹内

良夫

24年卒 今達 幸治

上原

正弘 (41年卒)

20年卒 林 幸男

橋谷

博

22年卒 中村 一雄

林

久雄 (平5年着任)

25年卒 岸 要

三澤

良明

26年卒 九鬼 敏隆

山下

大二郎

短期大学

渡辺

明

27年卒 榑 年雄

目片

康人 (61年卒)

28年卒 岡田 克巳

小林

久人 (平2年卒)

43年卒 篠原 長政

目片

康人 (61年卒)

44年卒 岡村 昭信

藤田

精治 (49年卒)

45年卒 村上 俊男

小島

一男 (52年卒)

46年卒 木越 俊雄

玉置

純 (平7年着任)

47年卒 宮地 淳

高木

一幹 (平8年着任)

48年卒 白石 晴樹

久保

好 (平12年着任)

49年卒 澤村 雅和

白石

晴樹 (47年卒)

50年卒 本庄 秀一

高木

一幹 (平12年着任)

51年卒 松本 浩一

花崎

知則 (平1年卒)

52年卒 河川 昭

岡本

朗 (32年卒)

53年卒 前川 眞也

54年卒 川澤 吉雄

55年卒 坂本 隆

企画運営委員会

委員長 東 正弘 (41年卒)

副委員長 中村 尚武 (41年卒)

委員 上原 正巳 (34年卒)

委員 松本 幹生 (38年卒)

委員 篠原 長政 (43年卒)

委員 村上 俊男 (45年卒)

委員 小島 一男 (52年卒)

委員 前川 昭 (52年卒)

委員 山口 久人 (平2年卒)

委員 小林 隆 (62年卒)

委員 目片 秀明 (平4年卒)

委員 岸 要 (25年卒)

委員 北尾 舒彦 (39年卒)

委員 澤村 精治 (49年卒)

委員 森崎 久雄 (平5年着任)

委員 藤田 典久 (51年卒)

委員 小島 一男 (52年卒)

委員 玉置 純 (平7年着任)

委員 久保 純 (平8年着任)

委員 木本 衛 (60年卒)

委員 目片 康人 (61年卒)

委員 岸 要 (25年卒)

委員 木村 一雄 (22年卒)

委員 宇野 光造 (27年卒)

委員 岡本 朗 (32年卒)

委員 北尾 舒彦 (39年卒)

委員 荒木 武彦 (43年卒)